

令和元年6月26日現在

機関番号：55402

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K02391

研究課題名(和文)『翰林五鳳集』の基礎的研究

研究課題名(英文)A fundamental research of "Kanringohousyu"

研究代表者

朝倉 和 (Asakura, Hitoshi)

広島商船高等専門学校・一般教科・教授

研究者番号：00390493

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：『翰林五鳳集』(以下、『五鳳集』と略す)は大日本仏教全書本に翻刻されるが、国会図書館蔵 鶺鴒軒文庫本が、現在は散佚してしまった清書本(原本)により近い形態を留めていると考えられるので、参着することが望ましい。例えば、『五鳳集』に収録される絶海中津の作品分布とその収集源に注目する場合、全書本『五鳳集』巻第48に見られる、彼の詩文集である『蕉堅藁』未収録の絶海詩3首は、鶺鴒軒本を参照すると、詩の配列順序の違いから絶海の作品ではなく、基本的に『蕉堅藁』が主な収集源であることが確認される。なお、『五鳳集』巻第48に収録される各詩の作者及び収集源を調査すると、当該巻の分布には、偏りがあると言わざるを得ない。

研究成果の学術的意義や社会的意義

『翰林五鳳集』は、研究者の利用頻度が非常に高い割には、不明な点が多い総集である。そして、利用に際して、唯一の翻刻本である大日本仏教全書本のみならず、鶺鴒軒文庫本や、内閣文庫蔵 旧修史館本も併せて利用する必要性を説く指摘は、五山文学を取り巻く様々な研究に影響を与えていると思われる。また、未刊行の大谷大学図書館蔵『詩集』は『五鳳集』と同じく、五山詩の総集という性格を持ちながら、かなり「原始的」な一面も併せ持ち、だからこそ、『五鳳集』に関する基礎的な事柄を確認・考察する際、大いに参考になる。

研究成果の概要(英文)：The research investigated the collection of poems called "Kanringohousyu" written by Zen monks in Japan in Edo era. As a result, it is preferable to refer to "Kanringohousyu" contained in "Gakkenbunko" rather than contained in "Dainipponbukkyouzensyo" since "Kanringohousyu" contained in "Gakkenbunko" was considered to remain the contents closer to the scattered original. For instance, in the case of focusing on the poems written by Zekkaichurin in Vol. 48, his three poems were selected in "Kanringohousyu" contained in "Dainipponbukkyouzensyo" and those three poems were not selected in his own collection of poems called "Syoudenkou". It is revealed, however, that those three poems were not his works comparing with "Kanringohousyu" contained in "Gakkenbunko" because of the poems' order differences. And also it can say that his poems in "Kanringohousyu" contained in "Dainipponbukkyouzensyo" were mainly sourced from "Syoudenkou".

研究分野：日本中世文学

キーワード：翰林五鳳集 詩の総集 百人一首 花上集 絶海中津

1. 研究開始当初の背景

(「五山文学」と、近年の研究状況)「五山文学」とは、鎌倉・室町時代に五山派の禅僧によって作成された漢詩文や、漢籍の注釈を核とする文学・学問活動を言う。なお、五山派に属さない禅僧の漢詩文も視野に入れる場合は、「禅林の文学」と呼称するのが一般的になりつつある。

近年、平成 17-21 年度特定領域研究「東アジアの海域交流と日本伝統文化の形成 寧波を焦点とする学際的創生」(通称：にんぶろ)という大きなプロジェクトがあり、中国哲学・中国文学・東洋史・日本史・日本美術史・日本文学等の研究者が関わって学際的な研究が行われ、東アジア全体における様々な文化的交流の中で五山に焦点が当てられたり、岩波書店の『文学』第 12 巻第 5 号(2011 年 9,10 月号)においては、空前絶後の「特集 = 五山文学」が企画されている。一見すると、五山文学研究のブームが到来しているかのような印象を受けるが、実は、研究者人口が少ないこともその一因であるが、日本文学側では、それ程盛り上がりおらず、活性化されているとは言い難い。従来から五山文学の研究状況は、日本文学の分野においては「傍流の文学」「学界の孤児」として敬遠される側面がある。その要因は作品が難解だからであり、具体的には、日本漢文であること、禅語が駆使されていること、作者である禅僧の悟境が超論理的に表現されることが多いこと、経書・史書、経典・禅書、詩文集というように典拠が多岐に渡っていること等が、難解なポイントとして指摘できる。

現在、我々が手軽に禅僧の作品集に触れようと思えば、『続群書類従』『大日本仏教全書』『大正新脩大藏経』の他、『五山文学全集』(別巻共全 5 冊、思文閣複製、昭 48。以下、『全集』と略す)や『五山文学新集』(本巻 6 冊、別巻 2 冊、昭 42-56、東京大学出版会。以下、『新集』と略す)等を利用するであろう。しかしながら、上記のシリーズで五山文学作品を網羅することは不可能であり、例えば、建仁寺両足院などを調査させていただいても実感するのであるが、未だに全国各地の寺院や文庫には、陽の目を見ていない、埃まみれの禅僧の作品集が山積みされているのが現状である。報告者はこのような状況を鑑みて、いま一度、混沌とした作品群を整理したり、新資料を発掘するという基礎的な作業を通して、五山文学を取り巻く様々な研究とリンクさせながら、停滞している五山文学研究を根底から揺さぶり、活性化させたいと考える。そして、如上の考えを持つに至ったとき、報告者の前で燦然と存在感を放つのが、『翰林五鳳集』(以下、『五鳳集』と略す)である。以下に作品の概要を示す。

(なぜ『翰林五鳳集』に注目するのか)

『翰林五鳳集』は、元和九年(1623)に後水尾天皇(1596-1680)が以心崇伝(1569-1633)らに命じ、代表的な五山詩僧 上限で虎関師錬や義堂周信や絶海中津、下限で希世靈彦や横川景三から、惟高妙安や策彦周良に至るまでの詩偈を撰集、書写させたものである。すなわち、五山文学唯一の勅撰漢詩集であり、また、多くの「詩の総集」がそうであったように、童蒙や少年僧の文筆修業のために編纂されたという一面を持ち合わせていたと考えられる。全 64 巻。伝本によって差異があるが、収録作品数は 16,000-17,000 首、作者数は 200 名弱と膨大であり、その収集源や収集態度は、未だに判然としていない。それにもかかわらず、『五鳳集』が殊に研究者から重宝されている、その最大の理由は、禅僧の散佚作品が多数収められている点にある。例えば、『新集』第 5 巻に収載されている瑞溪周鳳(1391-1473)著『臥雲藁』には、底本が残闕本のためか、七言絶句以外は見当たらない。一方、『五鳳集』には、瑞溪の七言律詩が夥しく見受けられ、玉村氏は同集第 6 巻において、「瑞溪周鳳集補遺」として、『五鳳集』から瑞溪の作品を抄録されている。

すなわち、『五鳳集』は著名であるが、研究がそれ程進んでおらず(五山文学全体に言えることだが)分量が膨大であり、内容に関しては、ほぼ未整理と言っても過言ではない。また、『新選集』『新編集』『錦繡段』『続錦繡段』『花上集』『百人一首』『北斗集』『中華若木詩抄』という、室町中・後期から、作詩の教科書・参考書として、喝食や少年僧の文筆修業のために編纂された、中国詩や五山詩(七言絶句詩)の総集の系譜の最終形として位置付けられるという意味でも重要な作品集である。報告者は、『五鳳集』に収められる膨大な詩を丁寧に整理し、各詩の作者や収集源を探る過程において、既存の禅僧個人の作品集(別集)を調査しながら、新たな作品集(群)の発掘を目指したい。そして、禅僧の散逸作品集(群)を特定しながら、『五鳳集』の各伝本の性質・部立・各巻の配列・入集作品の傾向・収集の基準・書写意識など基礎的な事柄を整理して、それらの成果を、五山文学を取り巻く様々な研究に結びつけたいと考える。

2. 研究の目的

本研究では、五山文学唯一の勅撰漢詩集である『翰林五鳳集』に収録される膨大な詩作について、その作者や収集源を追究することにより、現在では散逸している作品や、伝未詳の禅僧の作品を明らかにしながら、『五鳳集』に関する基礎的な事柄を整理したいと考える。具体的には、以下の計画を推進し、本目的の実現に努めた。

『五鳳集』の諸本間の関係を整理して底本を定める中で、各伝本の利用方法を定める。

『五鳳集』に収められる各詩の作者や収集源を探る。その際、収集源として、個人の作品集（別集）は勿論のこと、『百人一首』『花上集』『中華若木詩抄』など「詩の総集」も対象とする。

の作業により、禅僧の散逸作品や、伝未詳の禅僧の作品をまとめる。

『五鳳集』の部立・各巻の配列・入集作品の傾向・収集の基準・書写意識など、基礎的な事柄を整理する。

3. 研究の方法

(1) 平成28年度の計画・方法

『五鳳集』の伝本研究、諸本収集

報告者は拙稿「『翰林五鳳集』の伝本について」(『汲古』第53号、2008)において、『国書総目録』や『大日本仏教全書』の解題に記述があった 国会図書館蔵 相国寺雲興軒旧蔵本(旧帝国図書館本、仏教全書本の底本)、国会図書館蔵 鶯軒文庫本、国会図書館 端本(高木家旧蔵本)、内閣文庫蔵 旧修史館本、内閣文庫蔵 和学講談所本、尊敬閣文庫本、宮内庁書陵部本、京都府立総合資料館本(現 京都府立京都学・歴彩館)は調査済みなので、これらに加えて、花園大学蔵本や、可能ならば、琳瑯閣書店所蔵本(商品)等を調査して、底本を定め、各伝本の利用方法を確認する。

『五鳳集』に収録される各詩の作者や収集源の特定(鎌倉末期～室町初期の禅僧)

上村観光氏編『全集』には、28名の著名な作者、38種の作品集(版本中心)が収録されている。それに対して、『新集』の編者玉村竹二氏は、『全集』に収められていない五山文学作品を補うことを目的として『新集』を編纂し、44名の作者の105種に及ぶ作品集を収録した。まずは、『全集』や『新集』で簡便に別集を見ることが出来る虎関師鍊・義堂周信・絶海中津等、鎌倉末期から室町初期にかけての禅僧から、『五鳳集』に採られる詩を確認する。

未刊行の別集や「詩の総集」の調査・収集

『全集』『新集』『続群書類従』等に収録される作品集は限られるので、『五鳳集』収集詩に関連する、未刊行の別集や「詩の総集」を調査・確認したり、複写物入手する。主な調査先として、国立国会図書館・国立公文書館 内閣文庫・静嘉堂文庫・成簣堂文庫・大東急記念文庫・慶應義塾大学 斯道文庫・建仁寺両足院等を考えている。

(2) 平成29年度以降の計画・方法

『五鳳集』に収録される各詩の作者や収集源の特定(室町中期以降の禅僧)、未刊行の別集や「詩の総集」の調査・収集

調査対象の禅僧を室町中期以降にスライドしていく。この作業を継続的に行いながら、禅僧の散逸作品の特定や、伝未詳の禅僧の作品集(群)を整理する。また、引き続き、未刊行の別集や「詩の総集」を調査・収集する。

『五鳳集』の基礎的な事柄の整理、先行する「詩の総集」との比較

『五鳳集』の部立・各巻の配列・入集作品の傾向・収集の基準・書写意識など、基礎的な事柄を整理する。また、『新選集』『新編集』『錦繡段』『続錦繡段』『百人一首』『花上集』『北斗集』『中華若木詩抄』など、先行する「詩の総集」と比較する。

成果の公表

勤務校の紀要を中心に成果をコンスタントに発表し、その集大成的な内容は、関連学会の発表会で口頭発表して、全国誌に発表し、学界に成果を問いたい。

4. 研究成果

(1) 『五鳳集』の伝本研究

『五鳳集』の伝本の本文系統を、巻第10における150首に及ぶ詩の脱落や、巻第51における110首もの詩の省略に注目することにより、以下のように分類した。

部類本系統 (巻第10の脱落、巻第51の省略あり)

- ・国会図書館蔵 相国寺雲興軒旧蔵本(大日本仏教全書本)
- ・尊経閣文庫本
- ・京都府立総合資料館(現 京都府立京都学・歴彩館)本

部類本系統 (巻第10の脱落、巻第51の省略なし)

- ・国会図書館蔵 鶯軒文庫本
- ・内閣文庫蔵 旧修史館本

部類本系統 (巻第10の脱落あり、巻第51の省略なし)

・内閣文庫蔵 和学講談所本

分韻本系統

・宮内庁書陵部本

【注】平成 23 年度 東京古典会 創立 100 周年記念 古典籍展観大入礼会（11 月 11～14 日 展観会場は東京古書会館）に出品された『翰林五鳳集』14 冊（目録番号 754、江戸初期写、大型本、奥書「恵山光璠書焉判」）は、分韻本系統に属する。また、花園大学国際禅学研究所のホームページ（<http://iriz.hanazono.ac.jp/index.ja.html>）にて公開されている今津文庫本『翰林五鳳集』は、巻第 33 までしか残っておらず、巻第 10 の脱落が見られる。

仏教全書本は相国寺雲興軒旧蔵本を底本としており、部類本系統 に属する。雲興軒旧蔵本は最も古く、由緒正しき伝本ではあるが、巻第 10 や 51 に大量の詩の脱落や省略が存する。一方、部類本系統 の伝本には、巻第 10 や 51 に大量の詩の脱落や省略がなく、例えば、鶯軒文庫本を調査すると、仏教全書本では省略されがちな小序・長序・左注の類が丁寧に記されている。報告者は、雲興軒旧蔵本が最も古い写本であることに違いはないが、鶯軒文庫本の方が、現在は散佚してしまった清書本（原本）により近い形態を留めているのではないかと、という結論を持つに至った。

（2）『五鳳集』に収録される絶海中津の作品分布とその収集源

義堂周信とともに「五山文学の双璧」と称される絶海中津に注目して、『五鳳集』に収録される彼の作品分布とその収集源を逐一確認した。絶海の詩文集『蕉堅藁』の伝本は同一系統で、いずれも五山版から派生している。詩文の取捨による異同も無く、配列順序も殆ど同じであり、詩の総数も少ないので（計 172 首、他作 7 首を含む）調査対象に適していると思われる。

『蕉堅藁』収載詩で仏教全書本『五鳳集』に収められていない詩は、五言律詩部（1～22 番詩）では 30 首（うち 4 首が他作）中 7 首（うち他作が 2 首）、七言律詩部（23～68 番詩）では 67 首中 3 首、五言絶句部（69～79 番詩）では 20 首中 13 首、七言絶句部（80～128 番詩）では 55 首（うち 3 首が他作）中 3 首（すべて他作）である（『蕉堅藁』の詩番号は、蔭木英雄氏『蕉堅藁全注』清文堂、平 10 に基づく）。

現在最も流布しており、唯一の翻刻本でもある仏教全書本『五鳳集』巻第 48 に見られる、『蕉堅藁』未収録の絶海詩 3 首は、『五鳳集』の清書本（原本）により近い形態を留めていると考えられる鶯軒文庫本を参照すると、詩の配列順序の違いから絶海の作品ではない。また、仏教全書本には、詩の出入りや、大量の脱落・省略も認められ、鶯軒文庫本には、仏教全書本には見られない『蕉堅藁』収載詩を 12 首確認できた。

結果、『五鳳集』所収の絶海の作品に、彼の詩文集である『蕉堅藁』に未収録のものは見当たらず、『五鳳集』の収録作品は、絶海の場合、基本的に『蕉堅藁』が主な収集源であることが確認された。ただし、『蕉堅藁』の 89 番詩が重複して採られていたり、『五鳳集』の跋文にその作品名が引用されていたことから、絶海の作品も採られている、五山文学における代表的な詩選集（アンソロジー）である横川景三撰『百人一首』（100 首所収、すべて七言絶句詩）や『花上集』（200 首所収、すべて七言絶句詩）も収集源として数えられる。ちなみに義堂は『五鳳集』に 5 首採られているが、その収集源は、彼の詩文集である『空華集』ではなく、横川撰『百人一首』と『花上集』と考えられる。

なお、東京大学史料編纂所蔵『諸書要目』11（仏教全書所収『翰林五鳳集作者索引』）を手がかりに、『五鳳集』収録詩の作者の整理を試みた。詩の収録数が多い禅僧としては、月舟寿桂、天隠龍沢、策彦周良、希世靈彦、琴叔景趣、瑞岩龍惺、江西龍派、仁如集堯、西胤俊承、虎関師鍊等が挙げられる。一方、これは収集源が横川撰『百人一首』と特定できるが、1 首しか収録されていない禅僧も数多く見受けられる。例えば、以遠澄期、観中中諦、希世靈彦、岐陽方秀、古剣妙快、寂室元光、大本良中、曇仲道芳、物先周格、無求周伸等である。『五鳳集』の収集態度は、かなり特徴的であることが察せられる。

（3）『五鳳集』巻第 48 に収録される各詩の作者及び収集源の特定

（2）を調査する過程において巻第 48 に注目し、『五鳳集』の性質の一端を垣間見た。仏教全書本によると、巻第 48 には 174 首収録されている。詩の収録数が多い禅僧から掲げると（括弧内は詩数を示す）瑞溪周鳳（38）、万里集九（37）、驢雪鷹灑（24）、策彦周良（12）、江西龍派（11）、西胤俊承（10）、仁如集堯（7）、絶海中津・天隠龍澤（6）、瑞岩龍惺（5）、横川景三（4）、柏岫周悦（3）、九鼎竺重・琴叔景趣（2）、仲芳円伊・南江宗沅・希世靈彦（村庵）・梅陽章果・景徐周麟（宜竹）・彦龍周興・雪嶺永瑾（1）となる。翻って、『五鳳集』全巻を通じて、詩の収録数が多い禅僧としては、月舟寿桂、天隠龍沢、策彦周良、希世靈彦、琴叔景趣、瑞岩龍惺、江西龍派、仁如集堯、西胤俊承、虎関師鍊等が挙げられるので、当該巻の分布には、偏りがあると言わざるを得ない。また、収集源として指摘できる作品集として、瑞溪『臥雲藁』

(『新集』第5巻) 万里『梅花無尽蔵』(『新集』第6巻) 驢雪『驢雪藁』(『新集』別巻2) 江西『続翠詩藁』(『新集』別巻1) 西胤『真愚稿』(『全集』第3巻) 仁如『鏤氷集』(史料編纂所謄写本) 絶海『蕉堅藁』(『全集』第2巻) 天隠『黙雲藁』(『新集』第5巻) 横川『小補東遊集』『補庵京華後集』(『新集』第1巻) 南江『漁庵小藁』(『新集』第6巻) 希世『村庵藁』(『新集』第2巻) 景徐『翰林葫蘆集』(『全集』第4巻) 彦龍『半陶文集』(『新集』第4巻) が挙げられる。

なお、仏教全書本・巻第48の127～137番詩(七言律詩)の作者名は「瑞岩(龍惺)」となっているが、鶚軒文庫本により「瑞溪(周鳳)」に訂正して、集計した。『新集』第5巻に収載されている瑞溪著『臥雲藁』には、七言絶句しか見られないが、『五鳳集』には、瑞溪の七言律詩が数多く見受けられ、玉村氏は同集第6巻に「瑞溪周鳳集補遺」を設け、『五鳳集』から瑞溪の作品を抄録されているが、上記の127～137番詩は抜け落ちている。

(4) 大谷大学図書館蔵『詩集』(未刊行)

補助事業期間中における主な調査先としては、建仁寺両足院、国立公文書館内閣文庫、慶應義塾大学 斯道文庫、大谷大学図書館、龍谷大学図書館、新潟大学図書館、京都府立京都学・歴史彩館(旧 京都府立総合資料館)等が挙げられるが、禅僧の散逸作品集(群)や新たな作品集の発掘には労力がかかり、なかなか困難な作業である。そのような状況で邂逅したのが、大谷大学図書館蔵『詩集』である。

三益永因は、五山文学における艶詞の代表的な作者であり、『三益艶詞』や『五鳳集』でその作品を確認することができる。『詩集』にも、「三益」や「忘吾」の作として最多の111篇余が収められているが、同書には、それ以外の禅僧の作品も数多く収録されている。巻頭は雪嶺永瑾(識廬)の詩が50首、ついで三益が26首、驢雪鷹灞が17首、河清祖瀏が18首、横川景三が15首、江西龍派が11首、南江宗沅が29首というように、前半部は、各禅僧によって収録数に差はあるものの、七言絶句詩が各禅僧ごとに纏めて収録されている。また、抄物の解説に類した書き込みが行間に頻繁に見られることにも注目される。ところが、それ以降は、まさに文字通り混沌としており、作者は義堂・絶海、惟肖得巖、心田清播、九鼎竺重、希世靈彦等から、古剎妙快、正宗龍統、天隠龍澤、信中明篤、室町末期の月舟寿桂、惟高妙安、梅屋宗香、桂林徳昌、林下の一休宗純に至るまでバラエティーに富んでいる。もちろん、先に挙げた三益や横川や南江も頻繁に登場する。部立もなく、狭義・広義の艶詩、『花上集』や五山文学版『百人一首』に収録される作品と重複するもの、作詩の教科書・参考書として相応しい作品等を確認することができる。

上記の通り、『詩集』は『五鳳集』と同じく、五山詩の総集という性格を持ちながら、かなり「原始的」な一面も併せ持ち、だからこそ、『五鳳集』に関する基礎的な事柄を確認・考察する際、大いに参考になる。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計 6件)

朝倉 和、『花上集』抄訳稿 西胤俊承詩、広島商船高等専門学校紀要、査読無、41巻、2019、1-10

朝倉 和、『花上集』抄訳稿 鄂隠慧巖詩一、広島商船高等専門学校紀要、査読無、40巻、2018、1-10

朝倉 和、英語を用いた国語・古典授業の試み ドナルド・キーン英訳『徒然草』序段の活用、広島商船高等専門学校紀要、査読無、39巻、2017、119-126

朝倉 和、『花上集』抄訳稿 絶海中津詩、広島商船高等専門学校紀要、査読無、39巻、2017、1-12

朝倉 和、書評 岩山泰三著『一休詩の周辺 漢文世界と中世禅林』、和漢比較文学、査読無、57巻、2016、126-139

朝倉 和、「少年老い易く学成り難し」詩の作者と解釈について 「詩の総集」収載の意味するところ、日本語学(明治書院) 査読有、2016年9月号「漢文の最新情報」、34-45

[学会発表](計 0件)

[図書](計 1件)

朝倉 和、清文堂出版、絶海中津研究 人と作品とその周辺、2019、812

[産業財産権]

出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕

6 . 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：
ローマ字氏名：
所属研究機関名：
部局名：
職名：
研究者番号（8桁）：

(2)研究協力者

研究協力者氏名：
ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。